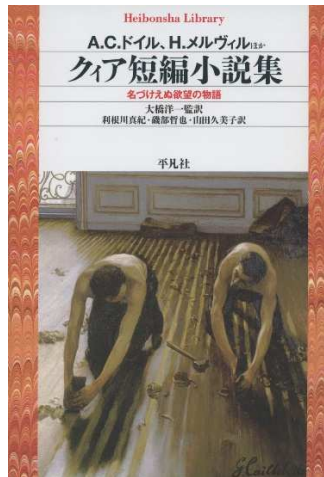


大橋洋一監訳; 利根川真紀・磯部哲也・山田久美子訳

『クィア短編小説集: 名づけえぬ欲望の物語』

(平凡社ライブラリー、平凡社、2016年8月、334頁)

風呂本 武敏



先行のシリーズ『ゲイ短編小説集』、『新装版レズビアン短編小説集』の姉妹編ともいべき作品であるが、大橋氏の解説によると、ここに集められたのは LGBT (レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー) 全体を指す面と、そのどれとも特定できない横断的な欲望・現象を指す「補完的併記的要素」の面があるという。従って集められた作品は勿論メルヴィル、ビアス、ワイルド、キャザーとその方面でもすぐに名が挙がる性文学の大家であると同時に、コナン・ドイルやジョージ・ムアというちょっと外れた作家も参加している。

まず「わしとわが煙突」であるが、ファリック・シンボルの途方もない煙突が居座る家を自慢する老人が登場するが、この煙突は主人公以上に主人公で、住居人はすべてその支配下にある。「四方の壁には暖炉がまったくない。暖炉はすべて中央の一つの巨大煙突に集まっており、煙突の四つの側面には上下二層の炉床が作られておるので、寒い冬の夜にわしの家族や来客が就寝前にそれぞれの個室で暖を取っているときには、自分では意識していないかもしれないが、そう、みな互いに顔を見合わせ、みな足を中央に向けておることになる」(21)。この状況だけでもいささか並外れた家の造りで、そこに住む人もそれに対応した異常な性格の持ち主と予想は付くが、煙突の存在が内部の部屋の構造や組み合わせに無理を生じさせ、その記述にクィアという単語が使われる。つまり客が部屋にたどり着くには不可解な扉を幾つも通らねばならず、「道しるべによって客を案内するのはかなりおかしく見えるだろうし、…訪問客が道すがらすべての扉をノックしてまわるのも、またおかしく見えるだろう」(32-3)。また煙突のどこかに先祖の一人が隠したかもしれない「噂が毒キノコのように生え広がることになるのは不思議なものだ」(42)。

「三人のガリデブの冒険」はこの一風変わった名前的人物を求める不動産王の新聞広告に応募して三人のガリデブを見つければ遺産相続にありつける、その相談を持ち掛けられたシャーロック・ホームズがその謎を解く。そもそもこの発端の名前が「特異性に誇りのようなものを感じ」(117)、「奇妙な名前が、思いもよらぬきっかけとなった」(134)話。地下のニセ札印刷所を人知れず操業するために夜の間邪魔な住人を居なくさせるこのような奇妙な詐術を使ったのだった。もう一つのホームズ物の「赤毛連盟」もこれと同工異曲で、「赤毛」という難題の条件で雇った男にブリタニカを転写させる仕事を与え、住人の留守を確保して、続きの銀行の金庫から金塊を盗むトンネルを掘る計画を見破る話である。

「ポールの場合—気質の研究」は年長者や先生への軽蔑と挑戦を隠そうともしない早熟なポールが、父の会社の金を横領してニューヨークに高跳びし、高級ホテルに滞在の数日にイエール大の学生と付き合い、シャンパングラスを味わうディナーをメトロポリタン劇場の雰囲気から夢の充実を味わって後悔はなかった。とはいえ破局は否応なく近づいてきて、彼は父のもとに帰るのではなく、鉄道に飛び込む道を選択する。このポールの生活を描写する単語で頻出するのがゲイである。「陽気な絵」(175)、「ここにいる素晴らしい人たちと陽気な彩りに」(177)、「階段に派手なクッションを敷いて座り」(182)、「女性の華やかな装い」(194)。

OEDの queer と gay を supplement も含めて引いてみると、queer では、従来、1) 奇妙な、異様な、奇矯な、外見や性格、2) 正常な状態ではない、めまいのする、貧血症のように気の遠くなる、3) 俗語で酔っ払った、(盗人言葉で)品質の悪い、無価値な、などが主として18世紀までの用例で挙げられている。補遺版では、a) アイルランドや船員言葉、b) (男性について)ホモセクシュアル(1922)、(アメリカの浮浪者・裏社会の用語で)偏屈な、犯罪者の、なよなよしたなどに使われ(1936)、イシャーウッドの『ベルリンよ、さらば』(296)の中から、「女の服装をした男たちだって？連中はホモかい？」の用例が挙げられている。ついでにいえば、補遺版はオーデン・グループからの用例の引用が多いのも目立つ現象で、オーデンやイシャーウッドが出かけた30年代はじめのベルリンはホモを刑事罰から初めて解放したワイマール憲法下の世界である。

もう一つの gay についてはまず、a) (人やその属性や行動について)、歓びの快活さ、気持ちの軽さ、活発さ、b) (馬について)、元気がよい、飛び跳ねる、c) (社会的快楽・浪費癖などで)、放縦な、不道德な、(俗語で女性の)ふしだらな、淫買の生活をする、d) 明るい・元気な顔色、e) 服装のけばけばしい、f) 非物質的に、素晴らしい、魅力的な、g) ひどくすぐれた、秀逸な、(廃語)などがあるが、補遺版では、1) 前衛的な、不適切な、行動の自由気ままな(米俗語)、犬の尻尾のピンと立った(1927)、2) gay dog; 気まま放縦な、3) ホモセクシュアル(1935) gay cat (米俗語) 若い未熟な浮浪者、どんな仕事も引き受ける hobo 浮浪者などが挙げられている。

これらをみればホモセクシュアルの概念が定着したのはどうやら1930年代それもアメリカが始まりのようである。そして二つの単語とも、従来の意味には必ずしもホモの規定は含まれていなかったし、どちらも服装や見た目の人と違う印象を述べていたようである。

伝オスカー・ワイルド「ティルニー」は就中最もホモセクシュアルな色の濃い作であるが、「伝」とあるようにどこまでがワイルドか疑わしいところもある。これはフランシス・キングが偽書あるいは戯書と

して描いた『ダニー・ヒル―高名な紳士の備忘録』で主人公に語らせているが「しばしば私が人間の生の最も悲しい事実の一つについてする考察はこうである、つまり繰り返しは最も激しい恍惚感でも慣行を生むことである」*Danny Hill* Guernsey Press (1977, p.81)を思い起こさせる多くのポルノの避け難い特徴でもあるが、この「ティルニー」も例外ではない。30頁足らずの小品ではあるが、数回の手淫・フェラチオ・肛門性交などを繰り返す。それを考えればワイルド程の繊細さの持ち主がこれほど無駄な繰り返しにこれほど鈍感になりうるかというのが、本書を彼の本物とすることにある躊躇を感じさせる理由である。

最後の「アルバート・ノップスの人生」は一番長い作品であるが、磯部・山田両氏の解説によれば、その生成についてより大きな作品からの書き直しであり、映画や舞台にもなった特異性が挙げられている。それだけでなく、大橋氏の解説にもある、「彼/彼女は、異性愛者と同性愛者の、どちらでもあり、どちらでもないように思われる」(313)のように、いささか処理に困る作品であるが、その理由の一つには、アルバートが女性を求める求め方に、生理的必然よりも、社会的体裁への処置のように感じられる部分があるせいではないか。先のティルニーのような同性であっても、狂おしく求めあう要素が希薄で、同性が二人共棲することの不自然さを社会的に非難されないための方策に過ぎない経過がそのまま続いているように思えてならない。ただ大橋氏自身も述べているように「名づけえぬ欲望」までも含むクィアのあいまいさをあらためて問い直し、「迫害と差別の歴史」を自覚的に解消する一助とする努力と壮大な意図を考慮すれば、このような辞書的定義をもう一度壊して考えるのもポストモダン的な風土に合致した試みかも知れない。

最後に小生にとって一番完成度が高いと思われる「彫刻家の葬式」はもっと触れるべきであったが、下手な解説より一読した充実感が何よりだと付け加えて本稿を閉じたい。